

近代の女性服について

49期生

I テーマ設定の理由

みなさん（女性）がまだ小さかった頃、「フリフリのドレスを着てみたい。」と思った事はなかっただろうか？ フランス人形達が着ていた、フワッと膨らみを持った地面にまでつくスカート、レースやリボンなどで飾り付けられた服装は、正に憧れの物だった、とそう思う。「いや、そんなことは全く無い。」とされていて方々も、中にはおられるだろうが、殆どの方々が「着てみたい。」と思ったに違いないだろう。

私も、幼稚園児の頃まではドレスにとっても憧れていて「着てみたい。」とっていた。しかし一方では「どうして今ではドレスを着ず、洋服を着ているのだろう。」という素朴な疑問を抱いていたのだ。こういった疑問は、単に「当たり前。」という一言で終わらせられないと思い、私はこの事を自由研究の課題とし、調べてみることにした。

II 研究方法

- (1) 図書館などを利用しての文献調査
- (2) 服飾や装飾の博物館へ行き、実際に目で見、考える実践調査

III 研究内容

1. はじめに

(1) 服装成立の条件

一体、人間は何のために服装を着用するのだろうか。その理由はおそらく、時代や民族が異なり、従って人々の生活している気候・風土の条件が異なる人間社会の仕組みの特徴によってさまざまなものが挙げられるだろう。予め予測される諸条件として次の3つが考えられる。(3つだけではないかもしれないが)

- ①実用性 気候、風土の条件によって、人間が快適な生活を営むための体温調節の有効な手段として服装が着用されたり、外からの物理的、化学的危険からも保全する必要によって、専ら実用的な目的。
- ②社会性 服装はこれを着用する人々の身分、職業のシンボルとなり、階級制のはっきりしている社会では、その身分を示す標識として役立つ。
- ③装飾性 各時代、各民族において様々な美しさを表現し、生活の中で具体化してゆくなかで、服装のデザインが決定される。

(2) 着装形式の基本型

- ①ドレーバリー型 体に巻きつけて構成されるもの。
- ②ボンチョ型 大きな布地に頭を通る穴をあけて着用したもの。(図4)
- ③カフタン型 前開きのコート一般のことをいう。
- ④チュニック型 ブラウスとスカートやワンピースのようなドレス型のこと。

2. ヨーロッパにおける服装の移り変わりについて

服装史の資料として残されている装いで、世界最古の物がエジプト時代の物である。私としては、エジプト時代から現存の服装まで調べたかったが、途轍もなく範囲や分野が多かったため、主に1800年以降を調べ現在の服装との関係などを調べた。

(1) 近代(1789~1914)の服装について(⇒は時代の移り変わり)



▲図1 1810年
エンパイア・スタイル



▲図2 1835年
ロマン・スタイル



▲図3
クリノリン・スタイル

フランス革命後から1820年頃までのモードをクラシック・スタイルという。いわゆるエンパイア・スタイル時代なのだ(図1)。この時代のスタイルは、フープもコルセットもなく、全体的に直線的で細いシルエットである。

フランス革命前のスタイルは図4のように、布が美しくまとめられ、造花やリボンも飾られ、華麗な服装が流行していた。とにかく、マリー・アントワネットの時代なのでイメージに迫力がある。しかし、それに比べ図1はあまり飾りたてされていない、どちらかという素朴な感じがする。それは何故か?

色々な本の中から探し当てた結果、そもそもフランス革命後フランス皇帝の位置に就いたのは、ナポレオンその人である。ナポレオンの欲求、理想、夢は、かつて大ローマ帝国のような国を実現することにあった。彼の統率する軍隊を巨大な組織のものにし、そして、彼は居室や寝室、婦人たちの服装などを、できるだけ古代ローマ風にすることを、側近者に命じたのである(古代ローマの図は次のページの図5)。そして古代風を取り近れたスタイルが、側近のデザイナー達によって作り上げられ、宮中婦人たちの服装を調整したのである。つまり、ナポレオンの「大ローマ帝国」という興味で革命前までとは全く違った服装になったわけなのだ。そして、ナポレオンが失脚しても約20年ばかり、エンパイア・スタイル(図1)が流行し、各国にも及んでいったのである。



▲図4 1778年
ロココ・スタイル

ところが、20年もたつと、図1のようなスタイルもあきられ、図2のようなスタイルへと変化していった。あれ? 図2と図4、似てはいないか? そうである。ナポレオン・スタイル(エンパイア・スタイル)もとうとうあきられ、人々は別の刺激を求めたのだ。そして何を求めたかという、かつて人民達が否定したルイ王朝時代のスタイルへの憧れだったのだ……。俗な言葉で言えば「流行は繰返す」。今も1970年代の物が流行しているように。しかも、ルイ王家の血統の王を位につけて、時代が求める服装の花を咲かせることになったのである。下はその変化を表したものの。



▲図5
ローマ時代

ナポレオン・スタイル (約1800~1825年)	⇒	ロマン・スタイル (約1825~1845年)
トップはナポレオン		トップはルイ王家血統の人物
比較的自然的な体型を示す古代		胴をコルセットで締めつけた
ローマ風で、ほっそりとした		フランス革命前のスタイルで
スカート		広がったスカート ←

また1830年代といえば、パリを舞台として、大小説家が輩出した時代だった。こういう恵まれた時代に、物質的理由も加わり、以前からの事情にプラスされ、変化していった。

イギリスに起った産業革命が進行する
↓
繊維業界を変容させる
↓
量産の確位で、布地が安くなる
↓
布地を豊かに消費する競争が始まる
↓
大きなスカート、布地を多く使った袖

後ほど説明するのだが、ロマンチックな精神を基調とするならば、身体への健康などは二次になるのだ。この時代(以前からもそうだが)は胴をコルセットによって締めつけられたため「食事が進まない」「いつもどこかが病んでいる」というような表情が社交の場で取り交わされていたようだ。現在でもそういう人達はいるが、この時代は全員が全員そうであったから、凄まじい。

話題は元に戻るが、ロマン・スタイルの次に来たスタイルは、次のページの図6のような、クリノリン・スタイルと言われるものだった。クリノリンとは、大型スカートの下に着る弾力性のあるアンダースカートのことだ。ロマン・スタイルの時代には、ふくらませたスカートの下に、何枚もアンダースカートを着て姿を整えたものだったが、クリノリンというアンダースカートは、それを一枚装えばふくらんだ姿になるのだから大流行したという。クリノリン・スタイル時代は、主にフランスのナポレオン三世の時で、1845~1870年代のことである。そして、クリノリンほどの大きなスカートを身につけた時代は、今までになかった。

では、どのようにしてクリノリンのような大型スカートが生まれたのか?

史上初の大型スカートが生まれた理由は、今までのナポレオン・スタイル（ロマン・スタイルも半分入る）などの、政治の大きな変革によってではなく、どちらかという、ロマン・スタイルのような産業での変革が大きな理由である。例えば、

- ・布地の生産が発達してきたこと
- ・1946年のミシン発明や、1956年のアニリン染料発見などが挙げられる。ミシン発明によって、比較的安価な布を機械で裁縫するのが、当時の婦人方に喜ばれ、大型スカートが出現したと考えられる。



▲図7 (1885年)
バサール・スタイル

クリノリン・スタイルの次に流行したのが、図7のような、ヒップの後ろをふくらませたバサール・スタイル (1870~1890年) であった。

ヒップの後ろをふくらませたスタイルになった理由は、あまり本には載っていなかったが、つまり、1870年のドイツとフランスとの戦争がそのままスタイルに響いたからなのだ。今まで私が紹介した1795~1870年間のスタイルは、全てフランスのパリが中心となっていたものばかりである。ところが、1870年そのパリがドイツ軍によって占領され、フランス人の精神は萎縮してしまった。そして当然スタイルにも大きな変更がうながされたのである。どうして、お尻だけをふくらませたスタイルになったのかは結局分からなかったが、戦争というものが、スタイルに大きく響いた事は間違いないだろう。また、その事と直接は関係ないが、1884年の人絹糸発明もスタイルに大きく響いたとも考えられる一つだ。

バサール・スタイルの次に流行したのは、図8のようなSカーブ・シルエットと呼ばれるものであった。相変わらずコルセットでウエストを細めているが、スカートは腰の線を自然に出すスタイルへと変わった。(今から約1世紀前までは、まだコルセットを使用していたのだ。)

(2) 1914年以降の服装について (1914~1924)

次のページの図9を見て頂ければ分かるように、今までのとは感じが違う服装である。私達が、図1~7までを「ドレス」という風に感じるならば、図8は「洋服」という風に感じてしまう。

何故、「洋服」と思われる服装へと変わっていったのか？



▲図6 (1860年)
クリノリン・スタイル



▲図8 (1900年)
Sカーブ・
シルエット

理由は、クリノリン・スタイルがバサール・スタイルへと変わった理由と同じで、戦争のためである。1914~1918年にかけて、第一次世界大戦があり、そして戦時中、これまでの戦争では見られなかった、女性達の直接、間接の戦争への参加が迫られた。女性達のこれまでの服装は、全く働く事を忘れた人々の物だったが、働かなければならなくなった事で、その改革がうながされたのである。

服装の変化としては、

- ・胴やウエストを締めつけるコルセットは捨てられた
- ・地にひくような裾は短く切り取られた
- ・裁縫に手数のかかるような服はやめられた
- ・活動性がとり入れられた
- ・頭髪を短く刈取った。(これは服装と直接は関係ないが)

等々である。

また、図9のようなスタイルはアンダーウェアから表着まで計算すると、戦前のスタイルの3分の1の布地でたりるものだった。実に活動的であるし、布地もいらぬという、本格的な合理的形態をもつスタイルへと変化した。

しかし、1930年代に入ると、世界はまた、いつ戦争になるかわからないという不安な情勢へとすべっていき、世界的に女性のスタイルは変化し、スカートの裾が少しづつ長めになり、髪も少しづつ長く伸ばすようになっていった。



▲図9 (1920)

3. コルセットについて

今までの文章の中に「コルセット」という言葉を数回登場させているが、自由研究発表の時にも質問があったので、コルセットについて説明してみようと思う。

コルセットとは簡単にいえば、胴やウエストを締めつけ細くする道具である(図10)。

ヨーロッパの歴史にコルセットが登場したのは14世紀後半のことで、初めは体の線を整えるためにコルセットを用いていた。ただ、コルセットと言え、ドレスの影で体の線を整えるためだけにあるという考えは間違いで、17世紀のスペインでは「見える飾りコルセット」も出現していた。しかし、18世紀のロココ時代には、コルセットは「見える」よりは、むしろ「かくす」方向に傾いていった。コルセットの紐は主に背中とどるが、脇の下とどることもあった。コルセット着用の苦しみについては、

「食事の時、私はコルセットの紐がきつすぎて息もできないくらいでしたから、何も食べませんでした。」と18世紀のフランス宮廷生活を綴ったジャンリス夫人の『回想録』にも、そう記されていたぐらいだ。

ところでみなさんは、コルセットは一体、男性と女性、または男女共々、誰が使っていたと思うだろうか？ 実は、男女共々に使用していたのだ!! 男性も使っていた!! という事実は、この自由研究をするまで、当然私は知らなかったのだととても驚いた。



▲図10 コルセット (1900年代)

(1) 男性が使用していたコルセットとは？

男性といっても、19世紀のおしゃれな軍人さん達が使用せざるを得なかったコルセットとは、決して人の眼にふれるものではなく、ひたすら三段ばらをしめつけて、スタイルのよい近衛将校とか騎兵将校のシルエットを演出するための、機能的なものだったのである。

(2) 女性が使用していたコルセットとは？

19世紀の男性にとって理想の女性とは、夫のためだけに身を飾り、たくましく経済力のある男性の保護がなければ1日も生きて行けないほどか弱く、貞淑な存在でなければならなかった。つまり、それらの理想を象徴する、蟻のように細いウエストを演出するための一つの道具だったのである。図10を見れば分かるように。レントゲン写真を撮るまでもなく、内臓が圧迫されて病気になるのは当然のことだった。

IV 結 論

服装というものは、社会事情、産業事情、戦争という事情などによって、スタイルに大きく響いてくるという事がこの自由研究を通していえたのではなかろうか。特に戦争という面で、第一次世界大戦の結果は、女性の社会的進出に伴う服装の変革にはっきりと現れ、女子服の近代化は本格的な第一歩をふみ出したのである。また、本文の方では紹介できなかったが、ポール・ボワレやココ・シャネルというデザイナー達の手によって、現在の服装の基礎が築かれ、ヨーロッパの植民地となった場所からの布地なども変革の理由だっただろう。

この後、1968年頃から人間の服装は大きさに云えば服装史はじまって以来の一大転換となる。実に、服装と歴史という大きなものは、切っても切り離すことのできない関係にあるのだ。

V 総 括

「どうして今ではドレスを着ず、洋服を着ているのだろう。」という素朴な疑問が出した結果は「全ての事情によって変わる、時代の移り変わりと同じ。」という、スケールの大きな答えだった。このようにスケールの大きな答えが返ってくると、調べた甲斐があり大変嬉しく思える。調べた事全てを書けなかったのが残念だが、一応中身は充実したものが書けたと思えるので満足している。

また、私が最後まで思い続けた事、それは「戦争という事情でしか、女子服の近代化がうながされなかったのか？ もしそうだとしたら、皮肉な事だ。」という考えである。結局、この答えは「世界大戦の起きていない世界」へ行かないと分からない事だが……。

・参考文献

- ・今 和歌次郎 (1972)「服装史 今 和歌次郎 第7巻」ドメス出版 285-296 P
- ・千村 典生 (1970)「ファッションの歴史」鎌倉書房 37-49 P
- ・飯塚 信雄 (1991)「ファッション史探険」新潮選書 57-60 P
- ・酒井 美代子 (1983)「ファッションデザイナーになるには 改訂版」ベリかん社 171-181 P 等々